

1999年カンヌ国際映画祭審査員グランプリ
最優秀主演男優賞・最優秀主演女優賞受賞

剥き出しの魂。注がれる眼差し。

ブリュノ・デュモン 監督作品

エマニエ

Un Film de Bruno DUMONT

L'HUMANITÉ



出演: エマニュエル・ショッテ Emmanuel SHOTTÉ / セヴリーヌ・カネル Séverine CANEEL
1999年 / フランス / シネマスコープ / ドルビーSRD / 148分 / 配給: ビターズ・エンド <http://www.bitters.co.jp/>

R-18

「ユマニテ」にまなざされて

斎藤 環 (精神科医)

『ユマニテ』を観ること、それは不安と覚醒の入り交じった、奇妙な時間に身を委ねることだ。わけても主人公ファラオンの素晴らしい眼差しにふれるとき、私たちはカメラアイに同一化することをも忘れてしまう。むしろそれは、一見したところ、あなた自身か映画によってまなざされるという、希有な体験にほかならないからだ。

そのまなざしはまた、あなたへと向けられた誘惑でもある。この映画は一見したところ、少女の強姦殺人事件を捜査するという刑事物的な外観を持っている。同時にまた、この奇妙な三角関係が、どのような展開をみせるのかという関心も喚起させる点では、恋愛映画的な要素も多分にある。(おそらくは事件からみで) 妻子をなくした刑事という設定には、トラウマものというジャンルへの配慮すら感じられる。しかし、やがてあなたは気づかされるだろう。この作品が、そうしたジャンルものや社会派的な身振りを装っているだけに過ぎないことに。そこであなたは言葉を奪われる。なぜならあなたの感想よりも素早く、映画はあなたを誘惑することに成功するからだ。そう、そのときあなたが連れて行かれるのは、いかなるフィクショナルな予定調和とも無縁の、ひりひりするような現実の縁なのだ。

現実に対抗したり介入したりする意志や力を持ち得ず、ただひたすらに目撃し、嗅ぎ、味わい、感受するのみの存在、ファラオン。そう、実は私にも、彼と同様の経験がある。たとえば精神科医として、今にも暴力に身をゆだねつつある患者と向き合うとき。そこで私たちに出来ることは、彼らをただ悲哀のまなざしとともに見つめ、彼らの罵倒をひたすら受け止め、鎮静のための言葉を小声で囁き続けること、それだけだ。そしてファラオンがまなざすものもまた、まさに世界の暴力性であり、それはもちろん、まなざされている私たちの側に属している。

さらにあなたは驚くだろう。セックスがこれほどの不安を喚起する描写のもてで描かれてきたことに。しかし誤解してはならない。それがどんなに剥き出しでそっけなく描かれていようと、そこにあるのは「ドキュメンタリーの視線」などではない。そのような、いつわりの現実性こそは、ブリュノ・デュモンがもっとも意識的に排除してきたものだ。ブリュノ・デュモンは現実を歪曲する。その歪曲の身振りは、ことごとく映画的な真実に奉仕するためのものでなければ何だろうか。彼の手によって「性と暴力」にこそ映画の真実が宿りうることが再発見される。それは、いかなる様式や紋切り型とも無縁の場所で、新たな語り口の発明とともになされなければならない。事故と偶然にためらいなく身を投じつつナルシズムを回避することで、そのような語り口が可能になる。そのとき、唐突に配備されたセックスによって喚起させられる不安を通じて、私たちは生の真実へと否応なしに導かれるだろう。だから不安を拒否してはならない。不安こそは真実の所在を指し示す、何ものにもまさる徴候なのだから。



少女の強姦殺人。剥き出しのセックス。 ——挑発と、その先に描かれる、人間の真実。

◆少女の強姦殺人事件。捜査担当のファラオンは、刑事らしくない、無垢でナイーブな男。彼は、下半身が剥き出しにされ、野ざらしになった無残な死体や、思いを寄せている女性ドミノの、恋人ジョゼフとのセックスを目撃するショッキングな体験をしながら、ただ悲しみとともに、それを静かに受け入れる。

進展しない捜査の一方で捉えられる、ファラオンと、ドミノ、ジョゼフの日常。田舎町の菜園や、町外れの道のどこまでも美しい風景。そうした張りつめた静謐さの作り出す異様な時間の流れと、性器もが映し出され、肉体のぶつかり合いとして描かれるセックスは、不安にさせるほどの強烈さで観る者に迫り、挑発していく。

そして、世界の姿を、五感を押し広げてどこまでも受け止めるファラオンを通じて、映画は、人間が極限的な状況でどう振舞うことができるのかを問いかけながら、人間としての「生」の輪郭を際立たせていく。それによって、人間の深い精神性までもが、フィルムに刻みつけられていく。

ラストシーン、途方もない愛でファラオンが犯人と向き合う場面では、タイトルが表す壮大なテーマ——“人間性(ユマニテ)”とは何かという問いが、静かな感動とともに、観る者に投げかけられていくだろう。

1999年カンヌ国際映画祭 審査員グランプリ・最優秀主演男優賞・最優秀主演女優賞 受賞

監督・脚本:ブリュノ・デュモン/製作:ジャン・フレア、ラシド・ブシャル/撮影:イヴ・カブ 出演:エマニュエル・ショッテ(ファラオン)、セヴリーヌ・カネル(ドミノ)

L'HUMANITÉ 1999年/フランス/シネマスコープ/ドルビーSRD/148分/R-18 配給:ビターズ・エンド <http://www.bitters.co.jp/>



ユマニテ

驚異の新鋭ブリュノ・デュモンの衝撃

◆監督のブリュノ・デュモンは1958年、北フランスの町バイユールに生まれる。哲学教師、ジャーナリスト、そして産業映画で10年間の製作と監督の経験を経て、『ジーザスの日々』で長編デビューを果たす。無軌道な少年の鬱屈した日々と、一瞬にして芽生える狂気を描いたこの作品は、独創性と斬新さでカンヌ国際映画祭でいきなりカメラードール特別賞ほか多数を受賞。続く第2作、少女の殺人事件を捜査する警部補の姿を描いた『ユマニテ』は、さらなるスケール感を供え、並みいる強豪を蹴落として、同じカンヌで審査員グランプリ、主演男優賞、主演女優賞の三冠を獲得する。その上映では、怒りをあらわにし、席を立つ者もいたというほど、強烈な賛否両論で一大センセーションを巻き起こした。

デュモンは2作とともに、生まれ故郷の町を舞台に、全くの素人を用いる。彼らの特徴を最大限に引き出して映画に反映させ、登場人物たちに、とてつもない魅力と深さを与えることに成功している。あらゆる既成概念を打ち壊し、通常の映画にはない特異さによって観る者を圧倒し、挑発するデュモン作品。その衝撃が、いよいよ日本でも明らかになる。

《秋のフランス映画特集'01～CINEMA X～》話題の4作品+2 一挙公開!!

「ユマニテ」

「ジーザスの日々」

10月16日

10月26日

■上映作品:「ロマンスX」「ベーズ・モア」+番外編:「郵便屋」(イタリア)「I.L.U.U.」(日本)

10/16 20:19 3:20 ユマニテ

10/20 全～22 3:20 ユマニテ 6:05 ジーザス

10/23 全～26 4:05 ジーザス

特集6作品共通前売鑑賞券 絶賛発売中!

1プロ¥1400/3プロ¥3000 (3プロ券は劇場窓口のみ)

□当日1プロ/一般¥1700・学生¥1400・シニア¥1000/3プロ券もあり

京都みなみ会館

九条大宮・近鉄東寺駅(JR京都駅よりひと駅)西へ150m
tel.075-661-3993 www.rcsmovie.co.jp/minami/